

グローバル教養海外実践（ジンバブエ）レポート

「ジンバブエの医療・看護」

看護学部 2回生 玉城聖佳

私はジンバブエ研修に参加し、2019年9月1日から9月12日の日程でジンバブエに滞在した。研修中はジンバブエの首都であるハラレで3日間を過ごし、University of Zimbabweでアフリカ人の価値観や世界観についての特別講義の受講やキャンパスツアー、応用社会科学センターや健康科学部との交流、病院の視察を行った。さらに、5日間を首都ハラレから約80キロ南方に位置するリング村で過ごし、3日間のホームステイを行った。ホームステイ期間中にはジンバブエ南部にある世界遺産のグレートジンバブエ遺跡を見学した。約10日間のジンバブエでの滞在で私が特に印象に残った点は、ジンバブエの医療・看護である。

9月5日から9月7日の3日間、ホームステイをさせてもらったリング村には、野生植物の実や根を利用した民間療法が一般的に浸透していた。滞在した集落付近の林では、4種類の天然の薬について知ることができた。1つ目は、Mutandashumba（学名不明）という木の根である。実際に土を掘って根を触ってみたが、シップの匂いがした。乾燥させて、粉末にした根を水に溶かして飲むことで腹痛への効果が期待できるそうだ。2つ目は、クロウメモドキ科のMuchecheni（学名：Ziziphus mucronata）という植物である。木の皮を取ってかむことで歯の痛みを和らげることができる。3つ目は、ニシキギ科のChizhuzhu（学名：Gymnosporia senegalensis）の木の葉で、葉をゆでたゆで汁でうがいをする、口腔内環境を整える効果があるという。4つ目の植物はGum treeと呼ばれているいわゆる「ユーカリ」の木で、グアバの葉とレモンとともにお湯に入れて煮だして飲むことで、風邪の治癒が期待できる。このGum treeの葉は薬としてだけではなく、爽快感を得たいときに噛むガムのような嗜好品としても用いられるらしい。

リング村でのホームステイ2日目には、村のクリニックを視察することが出来た。クリニックで働く看護師が村の健康課題やクリニックについて教えてくれた。村の第一の健康課題はエイズであり、特に母子感染の防止に力を入れているように感じた。1年次に履修した看護学部専門科目の「グローバルヘルス」の内容の実際を知ることができたとても貴重な経験であった。講義ではTBA（産婆）による出産介助の風習が多くの途上国に残っており、緊急時の対応の遅れや感染の観点から問題視されていると学んだ。リング村の看護師によると、村ではすでにTBAによる出産の介助は禁止されていた。すべての妊婦がクリニックでHIV検査を受けて出産するシステムがあることに驚いた。また、教科書ではHIVの薬であるARTは高額で、途上国では一部の人間にしか手に入らないとなっていたが、ジンバブエでは、ARTは政府が購入し、全てのクリニックに支給され、患者は無料で薬を使用でき

る。しかし、薬の供給は国の情勢に左右されるため不安定らしい。

9月10日には、ジンバブエ大学の健康科学部の医学生や看護学生と交流をした。海外の看護学生と交流を持つのは初めての経験で、ジンバブエと日本の医療・看護の違いをたくさん発見できた。最も驚いたことは、ジンバブエの看護学生の実習内容である。看護学生は実習として kumusha（農村部）へ行き、実際に予防接種や簡単な手術、助産を行う。日本では、看護師資格を取るまで、一般市民や患者に対して医療行為を行うことがないので、学生の間にも何度も注射や採血の経験をしているジンバブエの看護学生は実戦力になるし、とてもたくましいと感じた。また、ジンバブエでは看護師の業務内容も日本より多く、特に農村地域では、簡易的な診断や手術までも行う。看護師は全員、助産についても学んでおり、日本では助産師の業務内容にあたる仕事も行える。交流した学生たちは HIV 感染の検査もレントゲン診断についても勉強していた。看護師資格のシステムも異なっており、4年制大学で degree を取るには、授業料がかかるが、diploma（日本でいう准看護師資格）を取得する場合は、授業料が無料かつ補助金がもらえるらしい。日本では、医療を病気を治療すること、看護を対象となる人の生活を整えることと区別し、それを強調しているように感じるが、ジンバブエでは医療と看護を大きく区別しているようには感じなかった。日本で看護を学ぶ際には、傾聴や共感といった患者への精神的アプローチや生活を調整する役割が看護学のコアとなってくる。しかし、ジンバブエの学生に医療と看護の違いを聞いてもこの違いを述べる学生はいなかった。また、看護師の働く様子を見ても、声掛けをせずに静脈からの与薬を行っていたりして、医療の延長線上に看護がある認識であるように感じた。

ジンバブエに行き、クリニックや病院、健康科学部の教員・学生との交流をすることができたことは世界の看護について知ることのできるとても貴重な経験となった。村の人の薬草の知恵や看護師の技術力など、生きるすべや一人一人のたくましさに驚いてばかりだった。クリニックや病院には、エイズを初めとする感染症のポスターが多くあり、この国ではまだ感染症が多くの命を奪っていることも身をもって感じた。